

# 伊禮進順さん

1925(大正14)年9月7日生まれ

当時の本籍地 沖縄県

陸軍

所属 24師団歩兵第89連隊



戦地 西原、首里、摩文仁(まぶに)  
大里村(現南城市)

●1944(昭和19)年10月15日 現役兵として24師団歩兵第89連隊第2大隊第2小隊に入営

●1945(昭和20)年4月26日晚 首里へ移動命令

●1945(昭和20)年5月10日 歩哨に立っているとすぐ目前に米兵がいる

手榴弾の投げ合いになった。こちらが投げた手榴弾を米軍が投げ返してくるので、ひもをつけて投げ、返ってきたらひもを掴んで又投げ返す。私はまだ頭に手榴弾が一発入っている。アイヌの人がいたが両腿をやられワーワー泣いていた。大阪の兵隊はお腹をやられて七転八倒していた。一日中やっているとな方になって残っていたのは50名のうち2人だけだった。中隊から伝令が来て、午前2時まで現陣地を死守せよという。翌日は代わった第3小隊が全滅。まさしく生地獄だった。

米軍はどんどん南下、押された日本軍は一気に撤退を決め27日に大きく南下したように思う。この時期沖縄は大雨が続いて泥との戦い、補給も続かなかつたが落下傘で投下される食べ物(米軍の?)を拾いながら頑張っていた。兵器は機関銃が少しあるぐらいで壕に居座って進撃をいづらか止めることしかなかった。

私は“またび”という部落に砲弾を担ぎに行ったが、近くに落ちた砲弾の破片が右ひざの膝蓋骨にあたり足がのびなくなって與那に担がれていった。尿が2回で、一升瓶があふれた

●1945(昭和20)年6月20日 「負傷兵は戦闘の邪魔になるから出て行け」と大隊長に言われ追い出された

壕の入り口にはアメリカ軍の砲弾がぼんぼん当たっている。ひどいなと思ったが、今になって考えると大隊長以下元気な兵士はそのあと敵中突破をはかり与那原近くで皆死んでいるので、私が今あるのは大隊長のせいかもしれない。病院の壕に移り、6月の末から8月11日まで過ごした。負傷兵は毎日死んでいくが、毛布をかけてそのままにして、その中で生活している。

●1945(昭和20)年8月11日 米軍が来た

最初の壕はひどくやられたが、僕は3番目の壕にいて、幸い他の部隊から数日前に壕に来た中国戦線も経験した少尉が指揮をとってくれた。10メートルぐらいに足音が近づいたところで、手榴弾、次は毒ガス弾を3発投げられた。ふんどしでもタオルでも何でもいから水につけて口を覆え。ガスマスクは3月から壕の中にいるので湿気で役に立たない。一人はガスでのたうちまわっている。我慢できずに壕から頭を出す人間も。自分も最初は良かったが、口を覆っていても頭がぼとしてここで死ぬんだなと思ったが、幸い米兵は退散してくれた。明日になったらこの壕はやられるから解散しよう、30名ほどいたが全員で動けばたちまちやられるから、5名ずつ動こうとなった。

摩文仁(まぶに)の壕に移ったが、ここは膨れ上がった死体が積み重なり死臭がすさまじい。どうせ死ぬんだから、こんな臭いところで死ぬよりは外で死にたいということになり1日が出た。場所を変えながら1泊ずつしていたが、米軍が敗残兵を掃討するために歩き回っている。それが山の上に見えて、みな手榴弾を用意して構えたがみつからずに済んだ。米兵の駐留跡に食べ物を探しに行き、靴のクリームをバターだと思って取ってきて食べるとガソリン臭かったりした。

●1945(昭和20)年9月13日夜 大里(現南城市)で捕虜になる

先に捕虜になった日本兵が来て「お前らも出て来い」とラッキーストライクのタバコを渡された。「こんなものを持ってスパイじゃないか」と5人で相談したが、5人のうち最初3人が「どうせ死ぬんだし出ていく」、2人は残ると言ったが、夜明け出て行こうとすると2人も心細くなったのか出ていくことになった。

集まってみると70~80人いた。途中、百名の沖縄人用の収容所で民間人1人を降ろしたが、戦争中沖縄の人を見ることは全然無かったので、その収容所を見てこんなに沖縄の人がいたのかと驚いた。当時まだ牛島中将の自決も敗戦も知らなかった。駐留地に切り込みに行ったこともあり首を切られるだろうと思っていた。米軍が埋め立てたところを見て、戦争をしながらこんなこともしていたのかと思うと初めて敗戦を実感した。男は耳・鼻を削いで殺す、女は強姦されると教育されていたので、戦争が終わったから川で洗濯をしている女性を見ても可哀想だなと思いつつ逃げ回っていた。

(取材日:2008年1月24日、2013年2月7日)